

戦中戦後の記憶

—私の四歳から十八歳まで—

神奈川県 岩田桂子

一 東京での生活

私は昭和七（一九三二）年九月、父母にとつての初めての子供として、東京の品川で生まれた。おてんばな女の子で、蒸気機関車の通る踏切付近でのびのびと遊んでいた記憶がある。そのころはまだ江戸の名残で、ラウ屋（きせるの掃除）や風鈴などの物売りや、紙芝居の拍子木などの音が残っている。羽子板市、ほうずき市、そして朝顔市には必ず両親の手にぶら下がって行った。映画、歌舞伎も、わけも分からなかったが度々行っていた。調合してくれる唐辛子や、店先で手焼きしている煎餅や、作っている筆や、ふいごの火が赤々と見える鍛冶屋などが思い出される。

日比谷公園に遊びに行くときは電車に乗って行

くが、宮城前を通過するとき、車掌の号令で乗客は最敬礼をした。電車通りには、戦車のキヤタピラのあとがついた。東京の空には日の丸を付けた飛行機が飛ぶと、大人も子供も立ち止まって「万岁」を叫んで喜んだ。

二 海外移住の動機

父は旧制中学校卒業後、昭和の初めに四国松山から東京に出てきた。何か仕事を見つけようと思つたのであろう。

父の兄妹たちはすでに海外雄飛組も含め、商才を活かして皆、既に成功していた。頼りない弟を心配して資金を出してくれたので、父は撞球場や洋装店などを開店したが、昭和十年前後の不況のためとうまくいかなかったようで、私が物心つくころは勤め人だった。

一人っ子の私は生みの母の所と、父と共に私の知らないおばさんの所に行ったりきたりした時期があつて、そのうちにととうとう父とおばさんの所にいるようになった。当然、生みの母が私を

取り戻しにときどきやって来るので、そのトラブルを避けたかったのだと思う。

そのころの国策にのって、満州に渡れば魅力的な仕事が見付かると思ったのだろう。それが昭和十三年の秋の明け方、まだ暗いうちに始まった。父とおばさんと私の三人は長い間列車に乗り、黒龍丸（一万トン）という船で大連に向かった。

三 大連での生活

大連埠頭には、父のすぐ上の銀行員をしていた兄が、馬車で迎えにきていた。その伯父の家に、親子三人で半年くらい暮らすことになった。伯父の家は大連の聖徳街にあり、家族はいとこが三人と伯父、伯母の五人だったので、私たちが入って総勢八人で暮らすことになった。豊かなころでもあって伯父も伯母も穏やかな人柄で、一人っ子の私はきょうだいの楽しさも味わえた。

その半年の間に、父は伯父と相談しながら仕事を探していた。銀行員だった伯父は付き合いも広く、父の新しい仕事探しに一生懸命だった。いろ

いろと紆余曲折もあつたらしく、寒い冬の間約二カ月くらいは大連郊外の「老虎潭ろうこたん」という所で暮らすことになった。そこは別荘地のようで、家も広く豪華な大理石の風呂場には、温泉のようにお湯があふれていた。父の仕事探しの間、おばさんが家事手伝いをするということだったと思う。その家の主には、二、三度しか顔を合わせたことはなかったが、子供の私などには一瞥もくれず、いかつい怖い顔の人だった。

鮮明に覚えていることは、その家の半地下室のような所に、映画の時代劇に出てくるような角材を組んだ座敷牢があつた。物置にもなっていたようだが、そこに何度か、厳しい怒号と共に手を縛られた満人が入れられたことがあつた。その晩は、異様な物音と共にその満人の悲鳴と泣き声が夜通し聞こえた。女中頭の人と私のお母さんになったおばさんの二人が、張り詰めた目を見開いて、静かになるのを待っていたが、静かになると二人でおにぎりや飲み物を牢屋に持っていくのを、私も

後ろからついて行つてのぞくと、顔を腫らした満人が何度も「シエシエ」と、礼を言つて受け取つているのを見た。牢屋の満人は一晩か二晩くらいで入れ替わつて、どこかに連れて行かれた。

食べ物を持つて行くことは、その家の主には内緒だったらしく、あるとき排泄物の匂いが地下室に充滿して、ばれてしまった。その後は食べ物を持つて行くことはしなくなったが、一人で「かわいそうだ。かわいそうだ」と言つていた。

夜は度々酒席が設けられたり、マージャンをやつていたが、いくら大きなお屋敷でも、うるさくて眠れなかったことを覚えている。

四 奉天（瀋陽）での生活

昭和十四年春になると、父も建築の仕事が決まり、大連から特急列車で三時間の奉天に移つた。奉天駅前電車通りの角の交番から三百メートルほど入つた、三階建てビルの一階にあつた建築事務所奥の二間が、父の満州での出発となつた。確か松島町だつたと思う。

ビルの前は満鉄の宿舎で、右側には古着、鉄屑、石炭がらなどが、山のように積み上げられている倉庫があつて、天秤棒を担いだ人たちがせわしげに出入りしている、大きな満人の屑屋だつた。

左手の一区画行つた所は満州式の長家があり、四、五軒の満人の家族が入つていて、にぎやかに暮らしていた。纏足のおばさん、頭のてつぺんだけ髪を延ばしてリボンで結び、周りは剃つている子供、よちよち歩きの子供は立っていると普通のズボンなのに、排泄のときにしゃがむとお尻が出て、自分でできるようになつてゐるものを履いていた。また四、五歳の子が悪いことをすると、纏足のおばさんが激しく叱り飛ばしていたし、夕方になると家の前をきれいに掃いて水をまき、そのあとに椅子を出してゆつくりと通りを眺めるおじいさんもいた。

新しい土地に移つて友達もなく、寒さと埃っぽさで、私は度々風邪をひくようになっていた。外には出られなかったが、満人たちの生活を見るこ

とは子供心にも珍しく一人っ子でも、面白いものだった。

昭和十四年春、奉天市の春日小学校に入學した。家から左に行つて満人長屋の前を通り越し、十分ほど先の製薬会社の隣が学校で、割合に近かった。

ある日、ぴかぴかのランドセルに少しばかり傷が付いてしまうことが起こった。それは、学校の帰りに例の満人長屋の前を通ると、石が飛んできてランドセルに当たったのだ。振り向くと、私と年が同じくらいの男の子が、次の石を投げようとしていた。急いで逃げて帰つて親に話すと、「警察に突き出す」と言つて怒つているので、親に話さなければ良かったと思つた。

翌日、その子が家の前について、こちらをにらんでいる姿を目にしたときは怖かつたけれど、警察に連れて行かれなかつたのだと、ほっとした。その子は学校に行つていないようだった。満人の学校は少なく、またお金持ちでなければ行けないらしいということを両親に聞いていたので、とする

と学校に行きたいのに行けないので、私のランドセルに石を投げたのだ。それならば、向かい側の道を走つて通れば石も届かない、と考へてそのようにした。その後何か石が飛んできたが、そのうちにその子の家が引越したのか、姿が見えなくなつた。自分以外の人間に同情する気持ちが、初めて芽生えた出来事だつたと思う。

父はその建築事務所を一年ぐらいで独立したので、私たちも小さなアパートに引越した。今から考へると父の仕事は背水の陣の様子で、ストーブの設備のない一部屋で、トイレはアパートの外にあつた。厳冬のさなかの木炭火鉢の暖房では、度々一酸化炭素中毒を起こして、激しい頭痛に襲われたものだつた。

それも一年ぐらいで、次に移つた先が父の考へで、満人や朝鮮人や日本人が同じ井戸水を使って生活している一角だつた。植民地での日本人の立場を意識した選択だつたのだろうか、父は日本人だけが使う水道水には、毒が入れるというう

わさを聞いていたのだ。家は厳寒の地なのに日本の内地と同じ造りなので、あちこち目張りをしても、やはり寒い家だった。だが、だるまストーブを用いて、石炭で暖房することができた。

五 太平洋戦争のぼっ発

昭和十六年十二月八日、私が小学校三年生のとき、日本と米英などとの戦争が始まった。父も学校の先生も、一様に顔を緊張させていたので、これは大変なことなのだと感じた。

父の仕事は順調らしく、水汲みをはじめ家事が大変なので、日本人の女中さんがきた。父は軍関係の仕事も手掛けて、鉄道貨車の迷彩についての話などもしていた。満鉄宿舍の建築にもかかわっていて、苦力ククリをたくさん雇っていたので、苦力頭の李さんが家に度々きていた。仕事の指示を受けるのはもちろんだが、苦力のだれかが困っているのも、給料の前借りや就職を世話してくれというようなことを頼んでいたが、父は大抵聞いてやっていたようだった。「ジャングイ、シェンエ（ご

主人、ありがとう）」と言いながら帰っていった。

戦争が激しくなると暮らしがどんどん厳しくなり、衣類や食糧が配給制度になり、国家総動員法で日本人の女中さんは軍需工場に行くのでいられなくなり、李さんの家の十三歳ぐらいの子供がボーイとして家に来たが、やがてその子も軍需工場に動員されてしまい、それからはだれも来なくなってしまう。

ちようどそのころ、一人っ子の私にも弟が生まれて、小学校四年生になっていたお姉さんの私に、家事のほとんどが降りかかってきた。両親も町内会から言ってくるすべての指示をこなすのに（防空演習、出征兵士の見送り、配給物資の知らせ、配給当番など）精いっぱいやっているようすだった。

私たち小学生も、五年生から軍需工場への動員が始まり、危険な機関銃の弾作りをするようになった。大人の背の高さに合わせている機械なので、りんご箱やみかん箱に乗って作業をした。機関銃

の弾をそろえて機械に入れる作業だったが、あるとき足場が悪くて、私はよろけて思わず機械にかまったら、弾一発分の弁に指が挟まって怪我をしてしまった。左手薬指の爪がつぶれ血が止まらないので医務室に行くと、まず天皇陛下のいらっしゃる東京の宮城に向かつて正座をさせられて、「天皇陛下の赤子である体を傷つてごめんなさい」と言つて、額を床につけて謝るようと先生に言われた。血だらけになっている手に額をつけてお辞儀をして、それから治療してもらった。

昭和十九年十二月二十八日、わずかばかりの正月用食料品の配給を受け取りほっとしていたとき、我が家の一带はB-29による爆撃を受けた。敵機が去って空襲警報が解除されたので、防空壕を出た私たちが目にしたのは、遠い所まで見渡せるほど建物が壊されて、あちらこちらから火の手があがっていた。同じ井戸を使っていた満人の家、朝鮮人の家、そして私の家も同じように燃えてしまった。この空襲で、命を落としてしまった人も大

勢いた。一年生のとき、満人の男の子に傷つけられた赤いランドセルは、爆風によって蓋の皮の部分が全部はがれてしまった。目と耳を押さえてランドセルを背負って伏せていたのだが、その爆風で耳は数カ月の間、聞こえにくくなってしまった。

着のみのまま、奉天市朝日街にある、満鉄宿舍に避難した。教科書は助かったが、着替の物は級友が風呂敷包み二個も集めてくれた。クラスは五十人ほどだったが、空襲に遭ったのは私一人だった。

昭和二十年二月末ごろ、女学校を受けるための口頭試問があった。先生三人で、家族構成などを聞かれたあと、空襲の話になった。「敵機はどこからきましたか?」。私は「インドのカルカッタから重慶経由で給油してきました」と答えた。さらに先生の「空襲は大変だったね!」とねぎらいの言葉を言われたあと、「怖かったですか?」との問いに、私は戸惑った。「鬼畜米英」の時代である。怖いと言えば非国民になり、入りたい女学校を落

とされるかもしれない。でも幼いときから正直にせよと言われているし、さらに神様がいつも見ているとも教えられていた私は、すぐに答えることができずしばらく黙っていたが、たまたま「怖かったです」と答えた。三人の先生の顔が、なぜかほつとした優しい表情になり、うなずいていた。これで希望する女学校には入れないと自分では思っていた。だが、結果は幸いに合格した。つらい戦争中において、私を励ます一幕だった。

六 終戦前後

女学校には入ったが、勤労働員が度々あつてほとんど勉強することがなかった。担任の先生も召集されてしまった。夏休みに入ると同時に、一学期間のみの短い女学校生活も終わり、クラスメイトとも二度と会えないままになってしまった。

七月二十七日には、もうすぐ四十五歳になるという父に召集令状がきて出征してしまい、三歳の弟と母、そしてそのころ内地から呼び寄せていた母の妹と四人が残されてしまった。

八月三日。これからはだんだんと空襲が激しくなりそうなので、奉天から列車で約一時間ほどの田舎に、強制疎開ということで移動した。大きな掘っ建て小屋に三百人ぐらいが収容されたが、そこで二週間くらい生活していた。もうそのころになると食べ物も粗末で、大勢でひしめきあつて暮らすことは、大変にストレスがたまるもので、夜もあまり眠ることができなかった。栄養不足のためか、小さな傷もすぐに化膿してしまい、なかなか治らなかつた。夜明けになると、満人が棒などを持って中の様子をうかがいに來ることが頻繁になった。ソ連軍の飛行機が上空を飛んでいる。なにかしら、周りの雰囲気がおかしくなっていた。不安は感じていたが、日本が負けるなどとは思ひもしなかつた。精銳関東軍が今、戦っているのだ。すぐに家に帰れるように、日本軍が迎えにきてくれると思ひ込んでいた。だがその願いに反して、疎開した私たちが敗戦を知ったのは、八月十七日であつた。終戦の重大放送などは全く知らなかつた。

た。戦争が終わって三日も経っていた。

女、子供の移動には在郷軍人会があたってくれた。列車の手配などについて治安の悪い中を、満州国側と交渉をしてくれたのだろうと思う。二日後に奉天に向かうことが出来た。

とにかく無事に、奉天市朝日街の家の近くまで帰ってきたときに、父が満人の服を着て出迎えてくれた。そのときの安堵感は、全身の力が抜けるほどだった。

父は、奉天郊外で八月十五日に武装解除されたあと、有り金をはたいて満人の服を買い、軍服はその場で脱ぎ捨ててしまったそうだ。武装解除といっても初めから銃などはなく渡されなかったそうだ。満鉄宿舎に落ち着いてみると、軍関係家族の姿が見えない。どうしたのかと思って尋ねたら、もう日本に向かったとのことだった。

さて、銀行などの金融機関は間もなく閉鎖されるので、ぎりぎりに下ろした五千円ばかりが、父が満州で汗水垂らして働いて貯めた中から

使えた、最後のお金になった。

七 終戦後の一年

物価は値上がりし、ソ連軍の軍票が出回り日本円と交換しなければならぬことになったが、一年以上を暮らすにはとても足りず、売り食いでのぐしかなかった。

奉天市内の日本人は、同じ事情で市内一番の繁華街の春日町通りは、立売りの人がいっぱい出ていて真っ直ぐには歩けないほどだった。ネクタイを百本ぐらい握っている人、きれいな着物を腕にかけている人、食べ物を手を持っている人、みんな今までにそんなことをしたこともないような人たちで、黙って品物をただゆらめかしているだけであった。なんとその間をぬって帯地で仕立てたチャイナ服を着た満人の娘が、品物を物色しているのには驚いた。道端には、国籍も分からない遺体が何体か放置されているままだった。

父は、会社の倉庫にあった建築資材を売り歩いていたが、ときどき私を連れて窓枠にガラスを入

れる仕事をしていた。学校にも行けないので、家にいるよりは気晴らしになった。朝は暗いうちに起きて、新聞配達もした。早く行かないと仕事がなくなるので、男装をした叔母と暗い道を走った。昼はパンを仕入れて、アパートの階段を昇り降りして売り歩き、午後は井戸から二階までの家に炊事用とか風呂用とかの水を運んだ。ブリキ製のバケツなどは、戦争中に兵器を作るために資材として供出してしまっていたので、重い木の桶しかなかった。栄養状態も悪いせいで体がだるく、冷や汗が出る日が続いた。マンドリン銃を抱えて、頻繁にソ連兵が押し入ってきて、めぼしい物は時計、カメラをはじめほとんど強奪されてしまった。膨らし粉の缶に隠していた大きなルビーの指輪が、家族五人がひと冬食べられそうな麻袋入りの米になつた。

ソ連兵が「娘を出せ！」と言って探しに来ると、叔母と二人で素早く少し離れた防空壕に走って逃げ込み、中から蓋を閉め、真っ暗な壕の奥に長い

間うずくまっていたこともあったが、ある日足音とロシア語が聞こえたかと思ったら、ついに壕の蓋が開けられた。壕の入口から、日の光と共に銃の先がさし込まれた。恐怖で声をあげそうになるのを、必死で抑えた。幸い発砲もなかったのも、そのときは無事に家に戻ることができた。

ソ連兵のほかには、これまで生活に困窮していた満人たちが、集団で日本人の家に押し寄せて、根こそぎあらゆる物を略奪していく暴動のようなこともあったが、とても恐ろしかった。奉天で一番大きな満蒙デパートも、一週間以上黒煙をあげ、くすぶり続けていた。無政府状態なので、暴動の波が押し寄せるときは、やはり防空壕の所まで逃げるしかなかった。戦時中に使った防空壕が戦後も使われるとは思わなかった。

この満鉄宿舎ではあまりにも危険なので、中心街にあった父の会社の二階に、三家族で助け合つて暮らすこととした。もうすぐ赤ちゃんが生まれる夫婦、体が弱くて兵隊にとられなかった青年と

その奥さん、それに私たちの家族であった。その一週間くらいの中に、もう隣組の組織などはないも同然になっていたのに、「二十五歳以下の男性に米の支給をするから集まれ」という伝言が回ってきた。みんながこれはおかしいからと止めたのに、体の弱い青年が出て行って、やはり帰って来なかった。

その日の夕方、目抜き通りを、日本人男性が立ったままで詰め込まれたソ連軍のトラックが、何台も走り去るのを見受けたが、「米の飯をご馳走するよ！」が最後の言葉になって青年は戻って来なかった。

しばらくすると国民党軍も奉天に入ってきて、残留日本人の所に使役が割り当てられ、私も行くことになった。今まで「チャンコロ」などと言って侮っていた、敵の将校の家に行くのである。朝、父が心配そうな顔をして何か私に言いかけたが、目をそらして黙ってしまった。怖いことが起きそうな予感がして、緊張して出掛けた。将校と、そ

の部下の四人が住んでいる家の掃除と炊事が仕事だった。私はもう戦争には負けたが、日本人としては恥ずかしくない行動をしようと思う軍国少女だった。この仕事に慣れている一人の少女が先に来ていたが、女学校三年生とのことで、一年生の私にはとても大人に見えた。仕事が終わったとき将校の部屋に呼ばれたが、流暢な日本語でいろいろと話をしているうちに、私が空襲に遭ったことを話すと、「B-29には自分も乗っていた」と言ったので、びっくりした。アメリカ軍の飛行機に、中国の軍人が乗っていたなんて想像もできなかった。部屋を出ると、一緒に働いていたもう一人の少女が、部下の人たちに担がれて、笑顔で楽しそうな様子を見せて私の前を通り過ぎた。びっくりする私に、その少女は早く帰るようにドアの方に目配せをしたので、急いで家に帰った。何か大人の世界を垣間見たような気がしていた。

昭和二十年の冬も過ぎようとするころに、以前にかかったことのある小児結核が再発したのか、

微熱が出て下がらなくなり、家族と少しでも離れるように一番奥の部屋に寝て、小さい弟にも移らないように食事も別にした。医者もいないし薬もない状態で、ただ安静にするのみだったが、少し暖かくなると熱にうかされたようになり、ふと目覚めると引揚げ命令が出たらしく、私の寝ていた部屋にあった家族のリュックバックが見当たらない。私のリュックバックだけが、枕元にぼつんと置かれてあった。熱っぽい頭で、ひとりぼっちになってしまったことを悟った。みんなが日本に帰ってしまったこの異国で、このまま死ぬのかな！と改めて水を飲んでみると、がやがやと声が出てきた。引揚げ命令が間違っただけでなく、ふりふり怒りながらみんなが帰ってきた。私の顔を見ても何事もなかったように、「奥の部屋に入っていないさい」と言われるだけだった。

私を守ってくれる神様は、敗戦以来「天照大神」ではなくなっていた。たよりは血のつながっている父だけだったが、もうこれからは一人で生きて

いかなくはならないということを感じた。そのうちに、幸いなことに熱は下がったので、きれいな空気を吸えば病氣も治るか、治安が悪い中を用心しながら外に出た。「日本の土を踏みたい！　なんとか置いていかれないように元気に歩きたい！」という一心で、空気の良い所をゆっくり歩いた。

郊外にあった日本人の個人病院の横に、私と同じ年ごろの少女が、水薬の瓶を握ったままお向けに大の字になって倒れていた。顔を撃たれていたが、ひと目で日本人の子と分かった。暖かそうなオーバーを着た遺体は、長い間放置されたままだった。家では病気の母親が泣いているとの話だった。だれでも銃を持ち、いたずらに人を撃つてもとめられない治安状態での一年を体験した。

そのころ、共産八路軍が進駐してきていて、国府軍と市街戦があり、激しい銃声が煉瓦造りのアパートにこだましていた。

しばらくすると治安も少し良くなってきた。そ

のころ「ジャングイ、シェシェ」と言っていたあの李さんが、父の好きな日本酒や肉の塊や野菜などを、いっぱい持って家に来た。やはり父のことを「ジャングイ」と言っていたが、「これからは、満人が米の飯を食うね。日本人は赤い飯（高粱飯）だね」と嬉しそうに言って、ちよつといばつたようにして帰って行った。父は満人にひどいことをしていなかったことが分かり、また李さんの人柄が温かく心に残った。

八 引揚げ開始

いつの間にか体のだるさも消えて、昭和二十一年九月十二日を迎えた。私の十四歳の誕生日に、家族と一緒に荷車に揺られて、奉天駅に向かうことができた。途中、小学校のそばの道や、一年前一学期だけ通った女学校のそばを通り、もう二度と来ることのない町並みを目に焼きつけた。引揚げ船が出る葫蘆島コロトクまでは、無蓋貨車、すなわち屋根のない貨物列車に乗る。家畜の匂いのする貨車に、足をだき抱えるのがやつとぐらいのスペースで、

いつ発車するとも、いつどこで停車するとも分からない引揚げの旅が始まった。食事は、乾パンに水筒の水だけだった。一番困ったのは、貨車が動いているときのトイレである。だれかが大事な手荷物の中からバケツを出してくれたので、手持ちのシートで囲って用を足したが助かった。

だれかが、「ふるさと」を歌い始めそれがだんだんと広がってみんなで歌った。貨車が広野の真ん中で停まったときには、急いで用を足しに下車していたが、もし用を足している間に貨車が行ってしまったら、そのまま広野に取り残されるのである。列車が「がたん」と音がするときは、動き出すので貨車によじ登ったし、何時間も動かないときは、暴徒に気付かれないうちに静かにしていた。列車が動いているとき、雨がかなり降ってきたが、無蓋なので貨車の中は水浸しになり、小さい子が濡れないように大人が覆いかぶさっていたが、唇の色もなくなるくらいに寒くて震えていた。満州の九月中旬は、日中でもひんやりするくらいの気

候なため、後々病気になる人がいたと思う。二日間ぐらいかかったのだろうか、食べ物もなく葫蘆島の広い収容所に着いたときには、足がふらふらだった。

収容所といっても馬小屋で、コンクリートの床に寝た。食事は李さんが言っていたように高粱粥が一日二食で、飯盒のようなものを持って並んで受け取るのだった。穀類を持っている人は自分で薪を拾ってきて、石を三個くらい並べ、その上に鍋を乗せ煮炊きをしていた。私も二食ぐらいは食べられたが、周りの人の視線が痛くて、味も分からないくらいだった。戦争中には、隣組みんな少ない物資を分け合って暮らしていたのにも思っただが、そのときはそういうことはできなくなってしまった。

一週間後「第二大海丸」という八千トンぐらいの貨物船に乗船できた。昔聞いた「奴隸船」どれいせんを想像するような三層の蚕棚のような船底に、三千人が詰め込まれた。日本へは四日くらいで着く予定

だが、機雷がまだ浮遊しているので、当たったら船底はすぐに水が入り、助かりそうにない。二艘の救命ボートが上の方に吊ってあったが、船員用ということだった。食事は高粱粥で一日二食、甲板に出て海を毎日眺めて過ごした。イルカが二十頭ぐらい波頭を飛ばすようにして、私たちが出航した方角に泳ぎ去るのを何回も見したが、その姿を眺めながら食べられないかな、と思ったものだった。

割り当てられたスペースは一人が上を向いて寝るだけで私の隣は、乗船のときから既に顔がむくんでいて、髪は編み下げの年齢も分からない女の人だった。初めはトイレに階段を上がっていくのがやつとの様子だったが、そのうち動けなくなってしまう。栄養失調で膨らんだお腹を上にして、食事もとらなくなり、私がお湯をあげると、「私の家は佐世保に着きさえすれば、すぐなのよ」と話したので、「もうすぐだからね」と励ました。翌朝、体中がかゆくなつていつもより早く目が覚めた。虱の群れが私を目掛けて箠むしろの上を這ってきた。

はっと思つて隣を見ると、その人はもう冷たくなつていた。あまりにも簡単に亡くなつてしまつて、十四歳の私は死が自分にも身近なことであるのをしみじみと感じた。お棺が船に積み込まれていて、船内放送でみんなは甲板へ集まり、船は汽笛を鳴らして東シナ海にお棺を下ろし、綱を外す。しばらく浮かんでいたが、やがて静かに沈んでいった。最後まで見送つたが、涙するしかなかった。お棺は十数個用意してあり、子供用もあつたとのことだったが、そのうちに足りなくなり、しまいには粗末な毛布に包んで、汽笛と共に海に投げ入れて見送つた。

やつと佐世保に入港して、上陸準備のために「コレラ」の保菌者がいないかということで、恥ずかしい検便を受けたが、三千人もいると必ず数人の保菌者が見付かり、その度に二週間の上陸延長となつた。保菌者が三回も見つかり、目前の日本の島々を眺めながら、五十日以上も船内に留められた。占領軍の放出品なのか、その間人參の缶詰の

みの食事ということもあつた。階段を上がるのもだるくなり、隣に寝ていた佐世保の人のことが頭に浮かんできた。

不潔な船内には、下痢の匂いが充満していて、これ以上は耐えられなくなつていたところに、下船の知らせが届いた。下船の指示があつたときは、やつとのことで生き延びて、日本の土を踏めば、生みの母にも会えるだろうかと希望がわいてきた。日本への第一歩は、当然のことながらコンクリートの埠頭だったが、踏みしめる足のその下は、日本の土である。安堵感が体中を駆け巡つていた。

九 四国松山で

DDTの粉を浴びて三日ほど後に、一人当たり二千円ずつを受け取つて、それぞれの故郷に帰つて行つた。私たち一家は、父の故郷である愛媛県松山市の港町に向かい、父の実家にあつた酒倉の二階に落ち着いた。一階は既に平壤から引き揚げていた伯母夫婦が住んでいた。すぐに学校に行けるような状況ではなかったが、のんびりとしたお

国訛りの言葉が心地良く、そして奉天と異なつて十一月でも寒さをあまり感じなかった。

港町なので、地元の漁師さんがうわさを聞きつけて、引揚者の家の前には、バケツで一山ずつ市場に出せない雑魚ざさこを黙って置いていった。私たちの酒倉の前にも二山置いてあつた。本当に人の心のありがたさが身に染みだ。両親は、日銭を稼ぐため闇市で「いもあめ売り」をしたが、その間私は小さい弟を一日お守りをしなければならなかつた。お腹の空いている弟の気を紛らわせるため、無料の渡し舟に乗ってなんべんも行ったたりきたりしたが、船頭さんはいつものにこにこして漕いでくれた。女学生に会うと、すぐに隠れていた。今では何でもないが、前ボタンの男物のズボンが特に恥ずかしかつた。いつ学校に行けるか分からない状態で、読む本もなく、それよりも読んでいる暇もなかつた。学校にも行けない様子を見て、伯母夫婦が私を引き取って、「女学校に通わせてあげる」と申し出てくれたが、私は生みの母に会える

かもしれない関東に行きたかつたので、その話は断ってしまった。

十 埼玉へ

半年ほどして、継母の実家のある埼玉の小さな農家に、一家で移つた。父も都会に出なければ仕事もなかつた。私は、養女の話を知つたのだから学校に行けなくても仕方がないと、近くのグンゼ製糸に就職して寮に入った。履歴書には小卒と書いた。父が私を寮に送りながら、「少しの我慢だ！」と言つた言葉を励みに、大人の中で糸取り作業をした。でも、その我慢は二年も続くことになつた。グンゼ製糸では、戦後日本の復興のためストッキング用の絹糸をアメリカに輸出して忙しく、ときどき膝が眠さでがくと折れるほどに長時間労働だつた。私は休憩室にあつた文学全集を手当たり次第に読んだ。消灯のあと、廊下の五ワットの電球の下が唯一の楽しみ場だつた。

学業は四年間も遅れてしまつた。引揚者寮に入つた我が家に呼び戻されたのは、下の弟が生まれ

たから家事手伝いのためで、がっかりした。引揚者寮の二階には、大連から引き揚げていた二歳年上のいとこがいて、前年に早稲田大学の理工学部に入學していたが、そのいとこが何とか私に高校受験をと言つて、一カ月ぐらいの間に受験のための勉強を教えてくれた。英語が一番心配だったが、久しぶりの勉強に希望を見出して、とても嬉しかった。問題となつたのは受験資格である。女学校生であつたという証明になるものは、引揚げのときリュックサックの中に忍ばせていた、女学校でもらつた体育指導の小冊子しかない。在學証明にもならないようなものだったが、それを握りしめて、一人で夜間高校の事務所に行った。商業科の先生が私の話を聞いてくれて、「資格のことは職員会議にかけてみるから、受験を頑張つてみなさい！」と言われた。四年ぶりに座る教室の机、受かつたときの喜びは一生忘れられない。

昼間は近くの製袋工場に勤め、それから夜間高校に通つたが、往復四キロメートルもあるので、

一週間で下駄がすり減つてしまうほどだった。裏道を歩きながら、むさぼるようにして本を読んだ。昼休みは宿題をする貴重な時間で、だれにも邪魔されない紙袋製品が積みあげられた上によじ登つた。父は東京上野で不動産業をしていたが、収入も不安定で、継母の妹と私のわずかばかりの収入が一家を支えていた。私の授業料も滞る始末の上に、もう一人妹が生まれた。とうとう私は父に言った。「三人の教育はどうするの？ 私に勉強させて下さい。ずうっと手伝うから！」と、恐いもの知らずの年齢である。父は父で、十分に感じていたことを娘に指摘されて、言葉もなかつたようだった。製袋工場の仕事はかなりの重労働なので、夜間高校との両立は無理になつてきた。二階の伯母が、私のことを見るに見かねて、町のある老夫婦の所へ養女にとの話を持つてきて、昼間の高校に行かせてあげるとのことだったがやはり断つた。そのうちに、幸い事務職の募集があり採用されたので、体は楽になつた。

私はそのころからある計画を立てていて、二十歳になったら実行しようと思っていた。それは、

「戦争の犠牲と親の愛情に恵まれなかった二重の苦しみに、雁字搦めになっていた自分を、自由に解放したい」という計画であった。これまでに私は、親に対しての経済的な協力を何年もやってきた。私は本当に自由になって、親のような不安定な家庭造りではなく、真から信頼し合える人と出会い、安定した家庭を築きたい。何でも話し合え、慰め合える素直な人生を送りたい、との願望がとても強くなった。そして、個人の幸せを根底から覆す戦争が起こらないよう、努力する人生を歩みたいと痛切に思い始めたのである。

離れて遠き 満州・虎林

大阪府 榮 武

一 満州へ渡るまで

私は鹿児島県大島郡名瀬町出身の父と、山形県最上郡舟形村出身の母との間に、昭和六（一九三一）年九月五日、大阪市港区において長男として生を受けた。父、文義は榮家の長男、母、ナミエは斉藤家の長女であった。

父は大阪市電気局の職員であったが、昭和十六年十二月八日太平洋戦争が始まり、緒戦の勝利はあったものの、やがて諸物資の欠乏が著しくなった。特に都市部においては食糧品が目に見えてひっ迫し、店頭の商品は次々と姿を消していった。

当時、私たちが住んでいたのは、港区八条通りの大阪電気局の職員公舎であった。道路をはさんだ向かい側には、市電の運転手の教習所があり、塀の中には線路も引き込まれていた。